慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ケツテレル僧正と其の「労働問題及び基督教」（下）
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.1 (1918.) ,p.117- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180100-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜錄

ケッテレル僧正と其の「勞働問題及び基督教」（下）

高橋誠一郎

三

Mainz の僧正 Ketteler 曾て其の Heidelberg 大學教授 Nippold に寄せたる公開狀中に陳べて曰く「余は余が現實の宗教上の勤行及び余が管區の政務の外に、深く現代に於ける諸般の動搖を探究せり、而してそは常に必ずしも害心より出でたる結果にあらずして、單に誤解及び偏執より發生し來りたる人と人との間に於ける幾多相互軋轢の行爲を觀察するの機會を余に與へたり。是等の不幸なる臆斷及び誤想を是正するが爲めに、余は余が本來の任務を果したる後、余が生涯のあらゆる餘暇を献ぐるなり」と。

而して斯く當時の實際社會に發生し來りたる諸般の事變を觀察しつゝある間に於て到達し得たる法則は如何なるものなりしぞ。社會問題に對する Ketteler 僧正の解釋は如何なりしぞ。約四十に及べる彼れが時々の說教、演說及び著作中に在りて、殊に其の社會問題に關する意見を窺知し得可きものは Die Arbeiterfrage und das Christenthum. なり。

Die Arbeiterfrage und das Christenthum. は一千八百六十四年を以て Mainz に上梓せられたり。此の書一度現るゝや、全獨逸帝國は最大なる感興を以て之を迎へたり。由緒正しき貴族の一員にして、現に帝國內に於ける最重要なる管區の一に僧正たり、而して殊に其の專制的傾向

と基督敎的熱情並に過激なる僧侶魂を以て顯れたる人にして、殆ど大多數の政客の間に最も强烈にして且つ最も危險なる革命論者と認められたる彼の猶太人と宛も等しき情熱、論調及び辭句を以て勞働階級の擁護に努めたるものあるを見るは、蓋し是を以て嚆矢と爲す。洵に本書の全部を通じてKetteler 僧正はFerdinand Lassalleの人に等しき語句と思想と而して屢々文字とを使用したり。彼れは全然現代の產業組織に對するLassalleの破壞的批評を承認したるのみならず、其の社會改造の計畫に於ても、彼れは屢々此の猶太人の血を傳へたる革命家の所說に贊同し、生產組合の制度を採用するを以て、勞働階級を扶翼す可き最良の方策と觀たり。彼れは又Lassalleの Herr Bastiat-Schulze von Delitzsch' der ökonomische Julian. に於けると同じく、彼のFranz Hermann Schulze-Delitzsch の幻想に何等の信を置く能はずして、其の主張する「自助」の效果を嗤笑せり。然れども此の猶太の煽動家は這般の生產組合の組織が國家より受くる一億萬ターレルの補助金に依賴す可きを主張するに反し、Ketteler は飽く迄之を基督敎的慈善心の成果に期待し、信徒の任意的寄附行爲に依りて其の所要の金額を募集し得可きを信じたり。

遮莫 Ketteler 僧正が奔逸熾烈なる Ferdinand Lassalle の傳道に心醉し、彼れが自ら社會問題に關與するは正に其の基督敎徒として而して又僧正としての義務たるを確信し、其の著名なるDie Arbeiterfrage und das Christenthum.を刊行し僧俗の間に偉大なる反響を贏ち得たるの前に於て、多數の獨逸舊敎僧侶は既にLassalleの主張に感化せられ、公然此の猶太の煽動家の爲めに辯ずる所ありしなり。

曾てHatzfeld 伯爵夫人親しくKetteler に說きて、當時其の不信の情婦 Helene von Dönniges との結婚に對する障害を排除せんと焦慮しつゝありしLassalleの爲めに其の勢力を借らんことを哀請するや、彼れは最も懇篤に彼の女を遇したるのみならず、彼の女は又此の名聲赫々たる高僧がLassalleを說くに當つて深甚なる同情と敬慕の念とに滿てるの言辭を以てし、最高の尊敬を價するの人として之を推賞するを聽くの滿足を有したりと傳ふ。

而して此の民主主義の大先達が宛も通俗なる戀愛小說の主人公の如く、背約の婦人の爲めに戰ひたる決鬪に致命の重傷を負ひて三日に亘る大苦惱の後、遂に絕息するに至りたる時に於てすら、獨逸の僧侶等は勇んで、其の遺骸を受けたり。銳意彼れの追悼の爲めに盡瘁せるHatzfeld伯爵夫人は此の大煽動家の屍體に香油を以て防腐法を行ひ、而して之を公會堂に安置して一般公衆の觀覽に供せんと企圖したるも、政府は庶民の示威運動を畏れて彼の女の計畫を實施するを禁じたり。斯くてLassalleはBreslauなる猶太人の共同墓地に埋葬せられ、僅に「此處に思索家にして且つ戰士なるFerdinand Lassalleが肉身の遺骸は橫はる」と云へる簡單なる墓銘を止めたり。而も彼れが唯物主義者にして且つ猶太人の血を傳へたる革命家たり、加ふるに決鬪を以て斃れたるものなるにも拘らず、彼れに深き同情を有し、而して誠心誠意其の經濟的綱領中に包含せられたる意見の大部分を是認したる舊敎僧侶等は此の大煽動家の遺骸に對し、最も顯赫せる信徒に對してのみ獨り保留せられたるが如き埋葬の式を擧行したるなり。

四

勞働問題は主として「胃の腑の問題」(eine Magenfrage) にして、純然たる肉體的安樂若しくは有形的生存に關するものなり。政治問題は近代に於ける吾が議會の主要なる先占的任務を形成すと雖も、然も社會問題は人類大多數の關與する所にして、隨つて政治問題よりも遙に重

要なるものなり。各政黨が民衆の同情を贏得せんことを覓むる時、彼れ等は最も追從的なる約諾を呈示して彼れ等の意を迎ふるに努むるも、而も其の一度政權を掌握するや、直に之を遺却して顧みず、庶民は斯くて更に貧困に更に失望の裡に拋棄せらるゝなり。如何に多くの爲政家が單に人民を欺瞞するに資するのみにして、毫も彼れ等に眞正なる利益を齎すことなき這般の「溶解性意見」に依りて其の名聲を贏ち得たりしぞ。

概言すれば勞働階級の大多數は彼れ等が日々の勞銀に生計を營みつゝあるものなり。「而して勞銀は最狹の語義に於ける最も嚴密なる生活の必要品に從つて決定せらる。」換言すれば其の食、衣及び住並に彼れの有形的存在を維持するが爲めに必要不可缺なる所のものに從つて定まるなり。Lassalle と其の反對論者との間に於ける論戰は人民を欺瞞するとなくして克く之を否定すること能はざる明白なる狀態に這般の事實を置けり」。(Die Arbeiterfrage und das Christenthum. Mainz. F. Kirckheim 版十七頁)。

斯くの如き勞働者の境遇は蓋し何に因つて生じたるか。

Ketteler は全然 Lassalle の見解を承認して曰く「現代に於ては勞働はあらゆる他の貨物を支配する法則に從ふ可き一個の商品と爲れり。(die Arbeit ist eine Waare)。勞働の代價たる勞銀は必然他の商品の價格と等しく需要及び供給に由りて調整せらる。財貨の價格は必然生產に必要缺く可らざる費用に由りて決定せらる。然れども競爭は製造業者をして最低可能なる生產費に於て生產せしむるに至る、而して若し彼れにして能ふ可くんば、彼れよりも高き價格に於てのみ能く同一貨物を供給し得可き者の全部を悉く市場より驅逐せんことを努むるなる可し。又往々にして衰滅の危機に瀕しつゝある一部の工業を支持し、而して他の手段に依りては全然不可能なる其の存在を暫く延長せんが爲めに生產者は費用價格以下を以て販賣を行ふなり、斯くの如き經過より生ずる必然の結果は正に崩壞と敗滅となり。而して財貨の價格が生產費に由りて決定せらるゝ時に於てさへ、勞働の價格は人間の欲望、即ち其の食、衣及住の最少費用に由りて調整せらる。製造業者は其の競爭者を壓倒せんが爲めに彼れが力の限りを盡して生產原費を削減せんことを努む、若し勞働の供給過多なる場合には、勞働者は凶災の場合に於けると等しく、彼れにして活んことを欲せば、自ら絕對の須要品に對しても削減を加ふるの己むなきに至る可し。製造業者は市場の主なり、而して『最少の報酬に對して勞作せんとしつゝある者は誰ぞ』と問ふ、斯くて此の邀請に對し、勞働者は彼れ等が欲望の急迫に驅られ、相競ふて其の勞働の數量に比して價値著しく劣れる勞銀を懇請するに努むるなり。最後に他の貨物に對すると等しく、此の人的商品が費用價格以下にて提供せらる可き詛はれたる日の到來を見るなり。即ち卒直に謂へば必要は不幸なる勞働者を驅つて、彼れ及び其の家族の最も緊切なる欲望をも滿足せしむるに足らざる勞銀を哀請するに至らしむるの刹那に遭遇するなり。是に至つて彼れの勞銀は衣食住の用に供ふ可き最も嚴密なる意義に於ける必要品をも獲得するに足らざるが故に、之をも剝奪し去つて彼れ及び其の家族に對して何物をも殘すことなきなり。噫、最も嚴密なる意義に於ける必要品をも剝奪せらるゝこと數日に亘るものすらありと聞くに至つては、如何に彼れ等が窮迫と苦惱の深淵に沈淪しつゝあるかを、此の一語中に表明し盡して餘蘊なきにあらずや」云々と(同書十七及び九頁)。

今や勞働者即ち人類大部分の物質的存在が市場の動搖並に財貨の價格に依賴するの事實を疑

ふは不可能と爲れり。是よりも更に悲む可く更に悼む可きものあり得可きや。「こは現代の歐羅巴を通じて開かれたる奴隷市場なり、而して、そは吾が賢明なる自由黨員及び吾が仁慈なる共濟組合主義に由りて形成せられたる理論に基きて支配されつゝあるなり」（同書二十頁）。

然らば此の勞働階級の不幸なる狀態を誘致せる原因は何ぞ。あらゆる他のものをも支配せる主要なる原因二個あり。あらゆる勞働の團結的組織の抑壓及び大工場制度の發達を招致せる機械使用の不斷の增加是なり。這般の原因は自己の小資本を使用し、彼れ等自身の爲めに勞作する職人の數を減少せしめ、延いて賃銀勞働者の數を增加せしめたるなり。大部分「共濟組合主義の先達、大資本家、合理主義の敎授及び富者の食卓に饗應せられ、彼れ等の利益の爲めに日々主張せざるを得ざる通俗作者」より成る自由黨は終始虛妄なる約諾を以て人民を欺瞞しつゝあるなり（同書二十三頁）。「未だ何等の障害をも設けらるゝことなく、而して何人も嘗て之を制限せんと企圖せることなき自由職業及び自由勞働の弊害は組合組織の弊害よりも遙に民衆に取りて危險なることを闡明し得可し」（同書三十頁）。

「自由黨に由りて提唱せられたる救濟策は過てる原則に基礎を置くものなり。人々の間に存する不平等は頗る大なり。あらゆる其の自然的及び社會的不平等の儘に人類を常住の競爭の渦中に投じて顧みず、あらゆる保護の手段を撤廢するは是人道に背反せる罪惡なり」。勞働者に取りては自由は單なる愚弄に過ぎず、即ちそは彼れが其の勞働を最小の勞銀に對して提供するか若しくは其の勤務に對して何等の所要存せざる場合には空しく餓死するかの孰れかより自由なるに存するが故なり。（同僧正著 Liberalismus, Socialismus und Christenthum. 一千八百七十一年 Mainz. F. Kirckheim 版二十頁參照）。

五

然れども基督敎社會主義の代表者は是に至つて社會民主黨の首領と其の主張を異にせざるを得ず。後者に從へば、勞働階級は當に其の上に「現世の敎會が建設せられざるを得ざる嚴」なり。而も Ketteler に據れば、社會の安寧及び幸福を確保せんとせば、そは須く聖 Peter の巖の上に基礎を置かざる可らず。眞の救世主は基督を措きて復た覓む可らざるなり。

社會の各方面に於ける唯物的傾向に對する消毒劑として、更に高遠なる理想を承認せしむるに依りてのみ、獨り吾が勞働文明は其の敗滅より救はるゝを得るなり。未來の生活に對する希望のみ、獨り現世の生涯に於て全然更に幸福なる運命を期待する能はざる最大多數の民衆をして其の現在の生存狀態を容認せしめ得可きものなり。彼れ等をして欣然生活の業に從事せしむるものは基督敎徒的堅忍の意志にして、社會的法則の器械的勢力にあらず。基督敎に由りて敎えらるゝ「愛」は「粉碎せられたる」社會的原子の單純なる外部的結合が實現する能はざる所のもの、即ち眞に確固たる基礎の上に立てる共同組合の組織を成就し得可き結合力たるものなり。自由、秩序、正義及び慈悲に關する神の法則は克く私有財産の限界及び個人に對する社會の要求を調整し、若しくは富者の利益及び貧者の權利を擁護するを得るなり。

宗敎的訓練の下に在りて自助及び自修は初めて善福を導く可き力と爲り、祝福たるを得可し、然れども之無くんば彼れ等は身勝手、身最負に墮して屢々災厄を齎す可き力と爲り、呪詛と化するに至る、之を要するに、無制限なる自由競爭の災殃は基督敎的仁愛の發動に依りて縱令全然排除し得ざるまでも、少くとも之を緩和し得可し。

社會主義者 Saint-Simon 曾て其の臨終に際して曰く「記せよ、大事業を行はんが爲めには汝は熱誠を有せざる可らざることを」と。Ketteler 僧正は社會を高上し改新せしむ可き楨杆として基督敎的寛仁の力を指示せり。彼れは加特力敎會に於ける自己犧牲の精神及び年々宗敎的用途の爲めに醵出せらるゝ巨大なる金額を援用し、而して社會的目的に對する任意的献身の努力に基ける同一行爲に依賴せんことを期せり。「あらゆる俗界權力の命令は決して彼れ等のみを以て人間社會の癌腫を癒治し得るものにあらず。基督敎的慈善のみ、獨り有效なる醫藥として玆に現るゝを得るなり」と。

自由黨員は「自助」を說き、人民の敎育を說き、而して敎會及び僧徒に由りて與へらるゝ施捨を嗤笑するの傾あり、彼れ等が淺薄なる唯理主義は基督敎及び敎會の敎條の超自然的方面を諒解すること能はざらしめたり。「自助」に關する巧緻を極めたる談話も、終に勞働者をして彼れ等の境遇が羨望の價値あることを確とせしむるとなかる可し。不信なる自由主義の學說も決して彼れ等の狀態をして其の傭主のそれと比較するを妨ぐること非ざる可し。基督敎のみ獨り能く其の崇高なる敎訓を以て勞働者をして彼れが苦難なる生活に順服せしめ、而して彼れを導きて何等の抗拒なくして肉體的勞働に伴へるあらゆる苦楚を容認せしむるの力あるなり。即ち勞働者をして基督敎の原則を承認せしむるは、旋て又彼れ等をして社會に於ける人間の眞の位置を決定せしむるものは心性の如何にして社會的地位にあらざることを記憶せしめ、凜然たる耐忍と不撓の勇氣とを以て生活の艱難を忍受せしむるを得るなり。然れども自由主義者に由りて援用せらるゝこと頗る多き「自助」及び「人間の權威」は彼れ等の桎梏の苦惱を毫も輕減するに資することなきものなり。國家が民衆に對して施しつゝある無信仰的敎育は單に彼れ等の怨恨をして愈々大ならしむるものに過ぎず。富める不信者は現世の幸福と安逸とに其の滿足と快樂とを覓む可きも、然も彼れが一度勞働者より神及び其の子耶蘇基督に對する彼れ等の信仰を剝奪せんと努むる時は、彼れは不知の間に彼れ等を驅つて自暴自棄に陷らしむるものなり。

勞働者の共同組合は單に貧弱なる結果を與ふるに過ぎず。辛じて其の最も緊切なる欲望に應ずるに足る勞銀に衣食する勞働者は、Lassalle が頗る明確に論證せるが如く、此の種の組合に對し何等の利益をも發見すること能はざる可し。信用組合は單に其の規模は如何に小なるも兎に角一定の生產的企業を經營するの地位に在る者に取りて利用し得可きのみ、賃銀勞働者は是等の組織に由りて何等の利益をも享受すること能はず。原料購入の組合に關しても亦同一の論を作すを得可し。彼れ等は有形物を供給することなき賃銀勞働者に對しては何等の效用あることなし。加之、共同組合の利益は單に一時的の效果を有するを得るに過ぎず。勞働者の狀態は是に由りて毫も改善せらるゝことなきなり。彼の Hermann Schulze-Delitzsch さへ、不識の間に此の種組合の利益が全然相對的のものたることを告白せり。

Ketteler の意見に據れば、過激黨は少くとも自由黨よりも更に論理的なるものなり、而して Lassalle は殘忍なる眞實性を以て勞働階級の悲慘なる境涯を描出せる點に於て稱讃に値するものなり。然れども民主的社會主義者は彼れ等が財產權を拒否するに於て、重大なる錯誤に陷れるものなり。私有財產は自然法及び之を支配する永久不變の原則に基礎を有するものなり。財產の不平等は堪能及び資質の不平等より生ずる自然の結果なり。然るに國家は諸大學に於て唯物論を敎授するを許し、而して靑年をして懷疑

的思想に長せしむるが故に、財産權並に之を支配する諸法則は共に單純なる人爲的の制度に外ならざるを承認するの已むなきに至らしむ。然らば國家は無一物なる人民より成る多數が所有者の資産に對して權利を主張したる時、焉んぞ克く之を抗拒し得可き。即ち今や一切の問題は擧げて多數決に委せらるゝが故なり。若し近代の諸國家が單に多數の權利のみを承認す可しとせば、無一物なるも而も多數を形成する貧民は何が故に這個多數の權利を財産の修正に適用するを得ざるか。自由黨及び大學の敎條より之を觀察すれば Lassalle に由りて提唱せられたる方策は毫も不當のものに非ざるなり。然れども神を信ずる者は多數の決議が決定の權力を有するや否やを問題として考慮するとすらなきなり。

遮莫、財産權と雖も其の限界を有す。「加特力敎の神學者は財産權は之を饑餓の危機に瀕せる (extrema necessitate) 人類同胞を虐ぐるの點にまで擴張すること能はざるを說くに於て悉く一致す。こは明かに神學及び宗敎が如何に偉大なる影響を財産權の上に及ぼすやを示すものなり」Die Arbeiterfrage 七十八及び八頁)。窮民は扶助を受くるの權利を有す、而して國家は是に由りて毫も財産權を侵害することなくして牧師管區及び所有者に救貧率を課するを得るなり。而も國家にして這般の限界を踰越せんか、そは掠奪の罪を犯すことと爲る可し。略言すれば國家は勞働階級を餓死より救ふが爲めに人民に課稅するを得るも、而も單に勞働者の狀態を改善するの目的を以て之を行ふ可らず。然るに敎會は國家の行ふ可らざる所のものを行ふの能力を有す。

人間の活動にして若し法官及び收稅吏の主張せざるを得ざる合法主義の狹隘なる限界內に制限せられざるを得ずとせば、そは當に其の名稱をすら値せざるものなり。あらゆる人間の正義の上に高く神の正義は立てり、而して人は是に從つて彼れ自身の良心內に判官を見出し、而して彼れが神聖なる義務と思惟したる一定の慈善的事業を成就するなり。現代に於て宗敎的良心は次第に薄弱と爲り、而して之に代る可き課稅及び强制の錯綜せる制度を案出するの必要を見るに至り、斯くて殆ど總ての國家の敗滅を激成し、而して自由意志及び個人的任意の餘地を殘さゞるに至れり。

Lassalle が生産組合は正に勞働者の境遇をして其の不安定の程度を減せしめ、而して之を幸福ならしむ可き最確實、最公正且つ最有效なる手段たるものなり。然れども彼の Huber の如く這般の組合を創設するに要する資金を所謂「勞銀の鐵則」に支配せられて僅に其の日々の生存の爲めに嚴密に必要なるものを獲得するに過ぎざる勞働者の間に募集し得可しと期待するは非なり。彼れ等が蓄財は極めて僅少且つ不充分にして、單に小規模に於ける組合の基礎たるに適するに過ぎず、而して彼れ等が救濟せんことを企圖する害惡の範圍に比して何等實際的效用を有せざるものなり。而して又國家の救助に之を依賴せんとするは個人的發意に信賴することを薄きを示すものなり。生産の共同組合は任意的寄附行爲に由りて備辨せられたる資力を有する敎會に依りて振興せしめらる可きものなり、斯くてそは嘗つて過ることなき基督敎的義務の情操に訴ふるに由りて助長せしめ得可きなり。羅馬敎會は過去に於て宗敎的情熱に激勵せられて僧院を創設し、又是に寄進するの貴族を見たり。現在に於ても信徒の寄附行爲に依りて生産組合の發達を見んことを期圖し得ざるの理由あらんや。社會の特權階級をして聖 Francesco 及び聖 Elisabeth の態度を學んで、貧民に對する基督敎徒の義務を十分に認識せしむるは國家社會に於ける幾多の瘡痍を癒治する所以たるなり。

Ketteler 僧正叫んで曰く「大慈悲なる神よ、願くは直に生産組合の組織が勞働階級の幸福の爲めに繁榮を來す可き基督敎の土に、其の實り多き思想の種子を播く可き人々を憤起せしめよ」と（同書百四十四―五頁）。

六

Lassalle に由りて喚起せられたる激動が鎭靜したる後に於ても勞働階級の境遇を改善するが爲めに進んで協力せんとする Ketteler の希望は決して減ずることなかりき。一千八百六十九年七月二十五日、彼れは Liebefrauen に於ける勞働者の集會に臨みて演べて曰く「勞働者をして宛然一個の單純なる生産力、一器械の如くに、そが彼れを破壞するまで使用し盡す資本の罪は自ら壞滅せしめられざる可らず。是實に其の衰壞せしめたる勞働階級に對する犯罪なり」と。而して彼れは恰も Lassalle 其の人に等しき氣勢を以て吾が現代の産業組織に生起しつゝある資本の暴虐を痛罵せり。

遮莫時の經過も失意挫折も彼れが庶民に對する强烈なる愛情と現在の不正及市民の支配に從屬するの程度とを減殺し得可き將來に對する其の信仰とを薄弱ならしむること能はざりしと雖も、彼れが其の著 Die Arbeiterfrage und das Christenthum. を出版したる一千八百六十四年の交に於て有したる希望は次第々々に消滅するに至れり。彼れの抱懷せる加特力夜的樂觀主義、信徒の慈善心に對する其の信仰は日々の失意に壓迫せられて漸次消滅す可き運命を有したり。縱令彼れは仍ほ社會問題に關して論述するを息めず、而して永く之に興味を有したりと雖も、彼れは決して再び其の當初の計畫を主張することなかりき。而して後年國家的干涉に依賴し、政府の鋭意なる行動及び財政上の援助に依るの外他に救世の有效なる方策を認めざる眞の加特力敎社會黨の組織せられたる時、當然自己の利益、否、自己の特權をも擁護するの必要に驅らるゝが爲めに、自ら保守の態度を棄つる能はざる治者階級の個人的發意に過度の信仰を置くよりも勞働問題の解釋上更に危險なるもの存在し得ざる可しとの確信は晩年に及んで漸く彼れを捕ふるに至りしものなる可きか。

（十二月十一日夜譯纂）

（附記）本篇中に關說せる Lassalle. Hatzfeld 夫人及び Helene von Dönniges の關係に就きては曾て本誌上に連載せられたる小泉敎授の「フェルヂナンド・ラッサルと獨逸勞働者」に詳かなり。

倫敦時代の Karl Marx

阿部秀助

以下の論文は現時獨逸言論界の雄將である Maximilian Harden の Die Zukunft Jahrgang, XIX. Nr 3. 所載の露國の經濟學者 Maxim Kowalewsky の Erinnerungen an Karl Marx を譯出したもので譯文中「自分」とあるは Marx の場合を除いては Kowalewsky のことである。

所謂「萬國勞働者聯合」の初度の總會が Genf で催されたのは千八百六十六年九月三日のことで當時 Marx は資本論第一卷に其全力を傾倒してゐた結果、倫敦を去ることが困難で彼れは當時書を同志 Kugelmann に與えて「自分が今着手中である著述の勞働者階級に與ふる效果は、自分が Genf の會合でなす、總ての演說よりも遙かに大なるものである」との意を洩らしたの